変形文法における Nominalization の問題

澤木ユリ子

0. はじめに <Introductory>

ある自然言語のある文法体系の中で，その言語のもつ表現様式がどのように組み込まれ，その文法上の構造がその体系の中でどのように位置づけられるかという問題は，言語構造を体系としてまとめることを目的にするとき，主要な課題になる[1].

変形生成文法とよばれるこの文法では，他の文法においてもそうであったように[2]，その目標はいずれの言語にも共通して内在すると仮定される言語構造の性質についての規定であり，かつその規定は個々の言語により検証され得るという前提から，特定言語の理論でもある範疇が要求される．つまりその範疇は，いわゆる ≪Emic≫ 的な基準をのみ主題にするのでなく，≪Etic≫ 的な観点への参加をこめて，「ことば」の連鎖としてあらわれる「文」の結合様式を，普遍的な言語の構成要素に分析し，内面の構造を明らかにしようとするものである．

この小稿は，現代英語における Nominalization の問題が，変形文法の枠組のなかでどのように取扱われ，位置づけられ，どのような特性が抽出され得るかを検討し，その方法論の問題点のひとつをたずねようとする試論である．

0. 1 手順 <Procedure>

> "English is a nominalizing language.... The infinite capacity for producing noun phrases suggests that native speakers of English, perhaps intuitively, recognize the primacy of nominals in English."[3]

Jespersen は文法的に類似の性質をもつ「名詞・形容詞」の総括的な名称として広義に Noun を，狭義のいわゆる「名詞」には Substantive の名称を与えているが[4]，今日ではおおむね「名詞及び名詞的用法のもの」に Nominal，「純粋の名詞」に Noun の名称をもうけている[5]．しかし変形文法では，いずれも統語上のさまざまな文法的環境にあらわれる category symbols（類記号）のひとつとして扱われ，それぞれの category はその記号によって区別され独立して名称を与えられるのではなく，「文」の表層構造から深層構造へと導かれてゆく句構造に対応し，そのはめ込まれる位置によって，他の種類を異にする category から区別される[6]．

ここでは Nominalization の諸問題を，1．限定辞との相関関係，2．文構造の中で派生される nominals の形式，3．nominals に適用される成分構造規則と変形規則などにわけて考えてみたい．

0．2　略号 <Logogram>

PDP = Predicate Phrase	Dem = Demonstrative
PP = Prepositional Phrase	def = definite
Man = Manner adverbial	nom = nominalizer
Det = Determiner	Ag = Agentive
Nom = Nominal	Pass = Passive formative
Art = Article	

0．3　資料 <Material>

ここに引用されている例文の多くは，Lees: *The Grammar of English Nominalizations*, Chomsky: "Remarks on Nominalization" (MS.), Jespersen: *A Modern English Grammar*, Smith: "Determiners and Relative Clauses in a Generative Grammar of English", Rosenbaum: *The Grammar of English Predicate Complement Constructions* によっている．

1．1　さまざまな categories の中から N をとり出し，これに補文（Comple-

ments）の機能を加えた N Comp は，句構造において $\overline{\overline{N}}$ が $\overline{N}$ を支配するとき，$\overline{\overline{N}}$→[Spec, $\overline{N}$] $\overline{N}$ の一段式であらわされる．つまり $\overline{\overline{N}}$ は，$\overline{N}$ とその "Specifier" を含む要素，すなわち determiners（限定辞）と $\overline{N}$ との関係で表示されるという[7]．

また，NP→Det Nom で書きあらわされるとき，NP の直接構成要素としての Determiner と Nominal とのかかわり合いは，unit-word においてもっとも大きく，proper name においてもっとも小さく，mass-word (sincerity, butter, etc.) においては phonetically zero の形態をとるとされる[8]．このように，限定辞は NP 内の直接構成要素として nominals と密接な文法関係をもつものである．

1．2　限定辞の特性を知ることは，第一に派生され再派生へと展開される構成要素，nominal の特性を知るために，第二に省略・順序転換などの変形操作によって生成されるその他の prenominal, postnominal modifiers との文法上の関係を知るために必要とされる．

（1）* A hat is John's.
（2）　The hat is John's.
（3）* John is the linguist.
（4）　John is the linguist who spoke at the meeting.[9]

定限定辞は，原則的にはそれ自体の中に関係節を内包するもので，関係節の受容性を知る重要な要素となりうるものである．例えば，上例のような predicate sentences では，'a Noun is the Noun' という形式は許されず，(2) では 'John has a hat' の resultant sentence と解される．総称的な場合は別として，定限定辞の共起関係は，とりわけ文脈からの制限を受けるものであり，(3) は独立して存在することができず，(4) のように関係節が表層構造にあらわれるか，もしくはあらわれなくとも深層において仮設し後続すると仮定される場合にのみ成立する．これは後に Reduced Relative Clause などとして

noun complements に導入され，Det-N-Comp 構造の構成要素となる．Det-N-Comp 構造における Comp の概念は，また一方 verb complements, adjective complements となって補文形式を派生してゆく Comp 概念の基礎をなすものと考えられる．

(5) the man who is most likely to succeed
(6) the man most likely to succeed
(7) the most likely man to succeed

Det-N-Comp 構文 (5) が，postnominal から prenominal へと変形を受けた派生例である．

限定辞のもつ特性，[±definite] と関係節の Restrictive Rel(ative), Appositive Rel(ative)[10] との相互関係を例示してみよう．

(8) John is the anthropologist, whom I met at a party last week.
(9)* John is an anthropologist, who studies Indian tribes.
(10) John, who knows the way, has offered to guide us.
(11)* John who is from the South hates cold weather.

上例からも予測されるように，A(ppositive) Rel. は R(estrictive) Rel. より definiteness が大きいとされる[11]．従って 'be' を main verb とする predicate sentences の中では (9) の不定限定辞を許さず，定限定辞が Appositive Relative Clauses を導入する必要条件になる．(それ以外の文，すなわち common sentences では，普通いずれの限定辞もいずれの関係詞と共起し得る．)

C. Smith による 'three levels of det(erminers)' に従うと，

1) unique det. (ø: proper name)+A. Rel.
2) specified det. (the, a, etc.)+$\left\{\begin{matrix}\text{A. Rel.}\\ \text{R. Rel.}\end{matrix}\right\}$
3) unspecified det. (any, all, etc.)+R. Rel.

に類別される．また，限定辞と名詞との関係は，その definiteness (限定性) の度合から，John>he>the man>any man にわけられるという．

以上を綜合すると，(10)，(11) では限定性のもっとも大きな proper name は限定性のより大きな Appositive Rel. を attract して後続させ，他方，

(12) Any man who likes George Eliot is a connoisseur.

(13)* Any man, who likes Dickens, is gregarious.

では限定性の比較的小さな unspecified det. の any が，限定性のより小さな Restrictive Rel. を attract しその後続を条件とするようである．

限定辞と関係節との相関関係は，逆に後続の関係節の内容に応じて限定辞の［±def］の特性が選択され，意味上なんらかの対立を生じさせる場合がある[12]．

(14) He greeted me with the warmth that was expected.

(15) He greeted me with a warmth that was puzzling.

これは，lexical item としての名詞 (i. e. ここでは warmth) の特性を抽出するとき，strict subcategorization features[13] のみでなく，Det-Nom-S 全体にわたる文脈特性を対象とすることの必要性を提案したものである．これに附随しておこる lexical entries の細分化は，相互の構造の意味特性からも，つまり selectional features としても欠くことのできない条件に思われる．

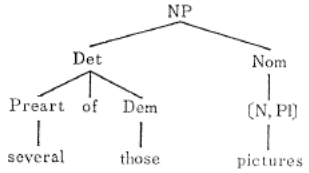
1. 3 限定辞を生成する成分構造規則は下図による．

(16) (i) NP → Det Nom

(ii) Det → (Preart (of)) $\begin{Bmatrix}\text{Art}\\ \text{Dem}\end{Bmatrix}$ (Postart)

(iii) Art → [±def, (NP)[14]]

(17)



NP の限定辞は，Article の ø morpheme をも含めて 2 つの category sym-

bols からの選択で構成され，これに先行する Prearticles (all, some, several, both, etc.) は屢々 'of' をともない，Postarticles (last, few, more, only, next, etc.)[15] によって後続される．また (16) (iii) の右辺の NP は complex feature である．

2. 1 英語における文構造の中で，Nominals を支配する NP はどんな文連結にあらわれるのであろうか．手短かな表現をつかえば，それは書き直し規則の句構造にあらわれる NP が支配するすべて，といい得るであろう．変形文法においては，言語は文の集合であり，NP は，文が無限に生成される recursiveness をもつとき，文の直接構成要素である NP もまた無限の recursiveness をもつ．

NP に支配される Nom は Nom-S を同一の規則の内部で派生させることによって[16] 関係節の Double Restriction をつくり出し，Nom が N-S を選択することによって Double Restriction をつくりだすことのない同格構文を生成する．表層構造から深層構造へとふかめられる過程で導入される Comp 概念にいずれの S も該当するのであるが，N Comp という極限の形式ですべてをあらわすことはさける．なぜなら，言語形式の出発点を動機づける書き直し規則において，個々の導入形態を無視できえないからである．以上を書き直し規則と句構造であらわすと次のようになる．

(18) (i) $S \rightarrow NP \quad Aux \quad PDP$

(ii) $PDP \rightarrow VP \quad (Loc)\ (Time)$

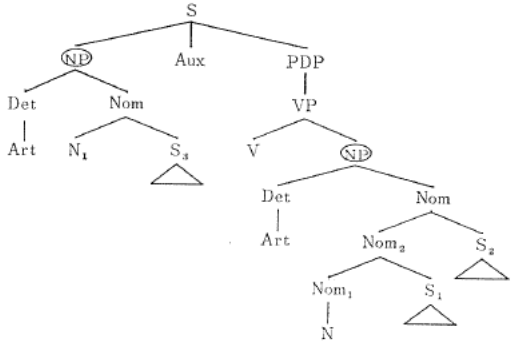
(iii) $VP \rightarrow V \quad (NP)\ (PP)\ \left(\left\{\begin{matrix} S \\ PP \end{matrix}\right\}\right)\ (Man)$

(iv) $NP \rightarrow Det \quad Nom$

(v) $Nom \rightarrow \left\{\begin{matrix} Nom \quad S \\ N\left(\left\{\begin{matrix} S \\ Comp \end{matrix}\right\}\right) \end{matrix}\right\}$

(vi) $Comp \rightarrow$ for-to

(19)

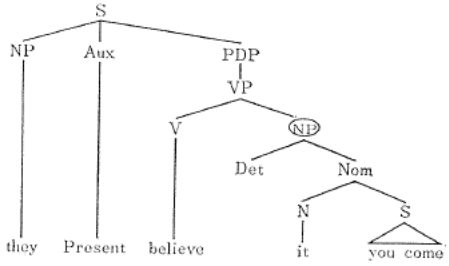


(S_1 は Nom_1 にかかる関係節， S_2 は Nom_2 にかかる関係節で，二重制限用法，S_3 は N_1 の同格文である。)

上述のように， NP に直接支配される Nom をもつ構文は，表層においてどのような構造をもち，文連鎖のなかでいわゆる nominals を生成しているのであろうか．次に，その nominals の形式と深層構造を調べてみよう[17]．

(20) (i) They believe that you will come. (F. nom.)
(ii) I prefer to play the piano. (Inf. nom.)
(iii) He prefers your playing the piano. (Ger. nom.)

(21)



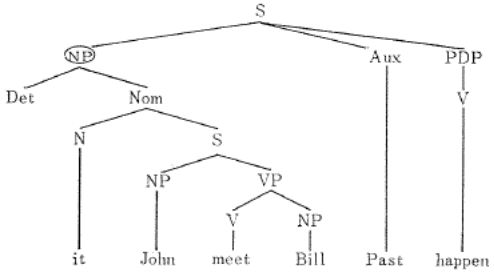
上例は Object Complementations に属するもので，名詞句補文を形成する that, for-to, nom (-ing, etc.) の選択が，nominals の形式を決定することに

なる．(20) の (i) は that, (ii) は for-to, (iii) は nom のそれぞれが適用された例文である．(i) は Factive nominals, (ii) は Infinitival nominals, (iii) は Gerundive nominals に所属する．

(22) (i) It happened that John met Bill. (F. nom.)
(ii) John happened to meet Bill. (Inf. nom.)
(iii) John seems to be a nice fellow. (Inf. nom.)

Vi の Subject Complementations に属するもので，(i) は (23) の句構造に Extraposition Tr. がほどこされて外置されたものである．(ii), (iii) はいずれも 'for-to' の外置変形．(iii) には 'to be' 消去の変形が適用され得る．

(23)



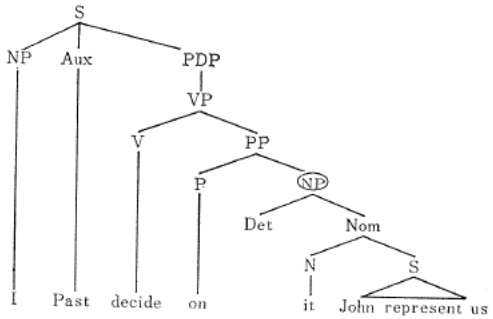
(24) (i) That you got up early surprised me. (F. nom.)
(ii) For you to find me this way embarrasses me. (Inf. nom.)
(iii) John's playing the bugle annoys me. (Ger. nom.)

Vt の Subject Complementations の句構造は (23) に準ずるため省略．

(25) (i) I decided that John should represent us. (F. nom.)
(ii) I decided for John to represent us. (Inf. nom.)
(iii) I decided on John's representing us. (Ger. nom.)

Vi の Oblique Noun Phrase Complementations に属し，(26) がその深層構造にあたる．

(26)



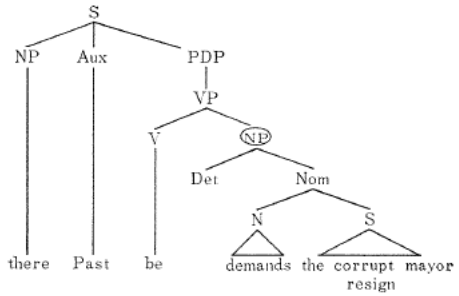
(27) (i) I persuaded John that he should go there. (F. nom.)
(ii) I persuaded John to go there. (Inf. nom.)
(iii) I persuaded John of going there. (Ger. nom.)

Vt の Oblique Noun Phrase Complementations の句構造は (26) に準ずるため省略.

(28) (i) There were demands that the corrupt mayor should resign. (F. nom.)
(ii) There were demands for the corrupt mayor to resign. (Inf. nom.)
(iii) There were demands for the corrupt mayor's resignation. (D. nom.)

上例はいずれも同格構文, (29) がこれに対応する句構造. (iii) は Derived nominals に所属する.

(29)



以上は文構造で派生される NP Complementations と nominals との関係をまとめたものである．なお，その他の Vi, Vt, Oblique VP Complementations として深層構造で補文形式をもつものについてはここでは省略する[18]．

次に，(24) と深層構造を同じくする文構造で nominals の形態をみよう．

(30) (i) That John refused the offer surprised me.
(ii) For John to refuse the offer surprised me.
(iii) John's refusing the offer surprised me.
(iv) John's refusal of the offer surprised me.
(v) John's refusing of the offer surprised me.

さいごの (v) は，(iv) と近似した文脈にあらわれる Action nominals に属する例文である．

ここでは nominals を5つのタイプにまとめて例示してみた．Factive nominals, Infinitival nominals 及び Gerundive nominals は，前述のように，文構造の中で3つの補文形式を選択し， Extraposition Tr., Pronoun Deletion Tr., etc. により各々の form を得ることができる．その他の Derived nominals と Action nominals[19] は， Gerundive nominals を中心とした派生として後述したい．Chomsky は，Action nominals を，基底部での構造分析が一定しないところから，Gerundive nominals と Derived nominals との中間に存在する 'mixed form'[20] として区分している．個々の構造に受ける変形規則は， より等質なものをまとめて， より多くの例を説明し， より大きな一般性をもつ規則へと統合される．しかし，ここでは詳細に取扱わないが，Nominalization の分野では，個々の Lexicon の redundancy rules に依存する度合が大きい．すべての lexical items が共通の規則のもとにいずれのタイプの nominals の形式を備えているのではなく，とりわけ Derived nominals は，多様な意味特性による環境指定で記述することが要請される．

2. 2 前項 1. 2 でふれた限定辞を除いて， nominals の周辺， つまり pre-

nominal, postnominal modifiers, aspects などは，nominals の派生過程でどのような表層構造上の変化を受けるのであろうか．次の例は adverbial elements が挿入された際に見られる各々の nominals の特性である．

(31) (i) That John had refused the offer suddenly surprised me. (F. nom.)
(ii) For John to have refused the offer suddenly surprised me. (Inf. nom.)
(iii) John's having refused the offer suddenly surprised me. (Ger. nom.)
(iv) John's sudden refusal of the offer surprised me. (D. nom.)
(v) John's sudden refusing of the offer surprised me. (Act. nom.)

(iv) と (v) は contextual features からみると相互に等価であり，かりに Derived nominals の形態素（例えば nominalizing morpheme の -al, -tion, -ity, -ment, etc.）を決める要素を *nom* であらわすと，Action nominals の ×*ing* を ×*nom* にかえる規則をもうけることで容易に Derived nominals への転換を許すものである．

Factive nominals を基準として各々の nominals の名詞性を比較するとき，prenominal adjectives を付加し aspects をとらない (iv), (v) において，名詞性はもっとも大きい．限定辞を付加する Gerundive nominals は Infinitival nominals よりも名詞性が大きく，'for-to' 形式を従える (ii) は Tense の制約をうけない点で Factive nominals よりも大きい．また，前述のように，Derived nominals は，派生過程での productivity の観点からすれば，Action nominals よりも多くの制約を受けるが，pluralize が適用され得る．

以上を綜合すると，名詞性はおよそ次のようにあらわすことができよう．D. nom.＞Act. nom.＞Ger. nom.＞Inf. nom.＞F. nom. (31) の (iii), (ii) におけるように，Gerundive nominals と Infinitival nominals はともに aspects をとることで類似点が多い．

(32) (i) It's great fun swimming there.
(ii) It's great fun to swim there.
(iii) I don't approve of his going there.
=I don't approve of him going there.
(iv) I can't wait for him to go there.

(i), (ii) は，Extraposition Tr. 及び補文の subject 省略による例文であり，objective case に移すことの可能な (iii) と (iv) の文連結では，その類似性はより大きい．

更に，対照的な Gerundive nominals と Derived nominals とを比較検討してみよう．

(33) (i) his criticizing the book before he read it (because of its failure to go deeply into the matter, etc.)
(ii)* his criticism of the book before he read it (because of his failure to go deeply into the matter, etc.)

内部構造では Gerundive nominals は VP adjuncts をともなって自由に文連結に適応するが，一方 Derived nominals は (33) (ii) に見られるごとく制約が多い．上例の before-clause, because-clause はともに基底とする NP の Comp ではなく，VP の Comp である．しかし，次の場合，

(34) (i) _____ is to be found on p. 15.
(ii) I studied _____ very carefully.

(33) (ii) の 'his criticism of the book' は (34) のいずれにも適応するが，(33) (i) の 'his criticizing the book' にはその受容性がない．Chomsky によると，両者は深層構造は共有しながら，Gerundive nominals の方はそれから直接的に派生したものであり，他方 Derived nominals は前者に対して 'analogy to' の関係で間接的に派生したものであるという[21]．

(31) の (iv) (v) は，adverbial elements が prenominal adjectives に転換した例文であるが，逆の場合，後者が前者の form をもちあわさないことがある．

(35) (i) John's uncanny (amazing, curious, striking) resemblance to Bill

(ii)* John resembles Bill uncannily (amazingly, curiously, strikingly)

(iii) the degree to which John resembles Bill, which is uncanny

多くの文連結では主として Lees による (iii) の form を基底として考えることができるが，実際には意味解釈の上で制約を受けることが少くない[22].

次に，(18) (v) の Nom→Nom S によって生成される関係節の句構造の問題をみよう.

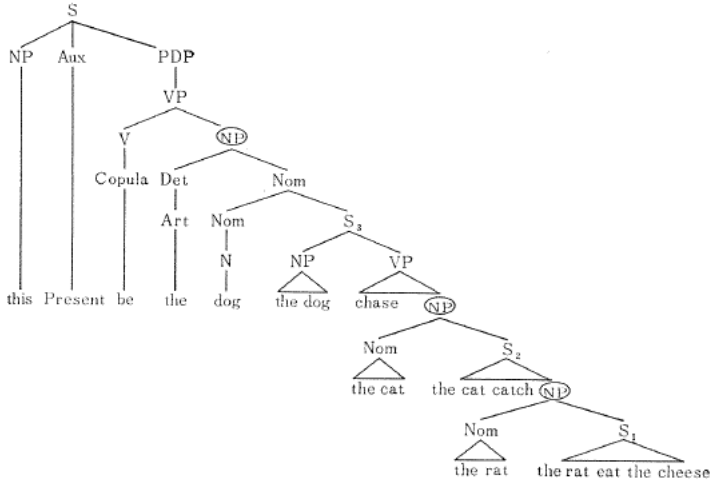
(36) (i)* The student who is lazy told me something that is strange.

(ii) The lazy student told me something strange.[23]

(ii) は前項，(6)，(7) に同類の例文で，prenominal と postnominal に位置づけられたものである.

(37) This is the dog that chased the cat that caught the rat that ate the cheese.[24]

(38)



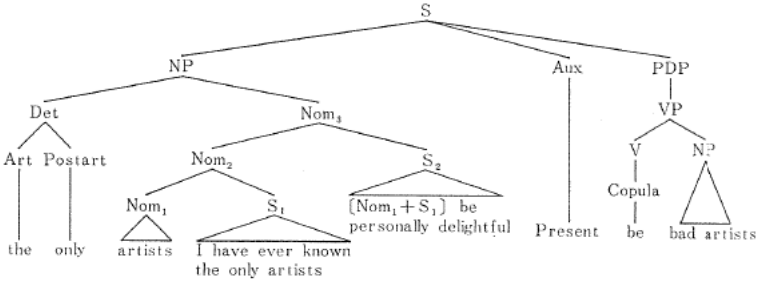
Recoverability condition に適合する関係節には Identity Erasure Tr. が適用されて，(37) を得る. Recursiveness のひとつを示す関係節の一例とい

えよう.

(39) The only artists I have ever known who are personally delightful are bad artists.

上例は関係節の Double Restriction である. 'wh-' 関係節は, Nom_1 と S_1 を支配する Nom_2, ここでは前文全体を修飾し, これに対応する句構造は (40) になる.

(40)



3. 1 Robert B. Lees による克明に分析された英語における名詞化の諸問題とその変形規則は, 高次の法則へと進展させる基礎をなすもので, 広範な領域にわたる密度の高い業績である. その中から提案される若干の問題について変形モデルをあげながら考察し, 2. 1 で述べた Gerundive, Derived, Action nominals を生成する nominalizers (-ing, -ity, -ment, etc.) を一括して category symbol の nom にまとめ, Aux から展開してみようと思う.

これを基底部の規則になおすと, 概略次のようにあらわすことができよう.

(41) (i) Aux → Aux_1 (Aspect)

(ii) Aux_1 → (that) (nom) Tense (Modal)

(iii) Tense → $\begin{Bmatrix}\text{Present}\\ \text{Past}\end{Bmatrix}$

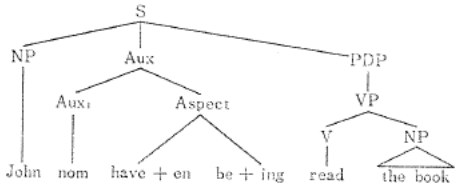
(iv) Aspect → (have+en) (be+ing)

(v) Man → (Adj-ly) (Ag)

(vi) Ag → by D

where: 1) nom=nominalizers
2) nom≠-ing$_1$+…+-ing$_n$[25]
3) D=Dummy symbol

(42) (i)



(ii) John's having been reading the book

(41) は，(18) の規則の Aux 以下の部分を伸展させたものである．

前述の (30) (iii), (iv), (v) の構文は，(18), (41) の成分構造規則と，名詞句補文形式の (41) (ii) の右辺の nom を導入することにより，その成分構造での最終の形は，

[[[it]$_N$ [John nom refuse the offer]$_S$]$_{Nom}$]$_{NP}$ [Past]$_{Aux}$ [[[surprise]$_V$ [me]$_{NP}$]$_{VP}$]$_{PDP}$

である．

(42) (ii) の深層構造は，(42) (i) のようになる．この基底部の成分構造に，いくつかの lexicon をあたえてみよう．

(43) (*John*, +N, −Det_, −Common, +Animate, +Human, ...])
(*book*, [+N, +Det_, +Common, +Count, −Animate, ...])
(*enemy*, [+N, +Det_, +Common, +Count, +Animate, ...])
(*read*, [+V, +_NP, +Object-deletion, ...])
(*destroy*, [+V, +_NP, ...])
(*surprise*, [+V, +_NP, +_Det [+Animate], ...])
(*sudden*, [+Adj, +_ly [+Manner], ...])

次に，(42) (i) の深層構造に T nom 変形 (Optional) を設定してみよう．

(44) T nom:

SI: $\underset{1}{\underline{NP}}$ $\underset{2}{\underline{nom}}$ $\underset{3}{\underline{(Asp)}}$ $\underset{4}{\underline{V}}$ $\underset{5}{\underline{(NP')}}$ $\underset{6}{\underline{(Adj}}$-$\underset{7}{\underline{ly)}}$ $\underset{8}{\underline{Z}}$

[Gerundive nominals]

SC: 1) Substitute POSS-ing for nom

[Action and Derived nominals]

SC: 2) a. Substitute POSS- $\left\{\begin{matrix}1. & \text{ing} \\ 2. & \text{Morph}\end{matrix}\right\}$ for nom

b. Add *of* to NP′

c. ⇒ 1 6 2 ϕ 4 5 ϕ 8

where: POSS='s

Morph=[+N][26]

上記の T nom 変形の SC: 1) から (42) (ii), (31) (iii) などの Gerundive nominals を，また SC: 2) の a. 1. を選択することで (31) (v) などの Action nominals を得ることになり，SC: 2) の a. 2. を選択することで (31) (iv) などの Derived nominals を得ることができよう．

Derivative morphology については，ここでは試案として [+N] の feature をあたえることのみにとどめ，T nom 変形から意味部門に入り，個々の形態素の分析と統合がおこなわれ，意味解釈を得ることになろう．

(45) (i) the enemy POSS-Morph $[[\text{destroy}]_V\ [\text{the city}]_{NP}]_{VP}$

(ii) the enemy's [+N, destroy] the city

(iii) the enemy's destruction of the city

(iii) における 'destruction' は，音韻部門で最終的に派生されることになる．

(46) (i) the book is $[\text{able}\ [\text{for the book to be read}]_S]_{Adj}$

(ii) the book POSS-Morph $[\text{be}\ [\text{readable}]_{Adj}]_{VP}$

(iii) the book's [+N, be readable]

(iv) the book's readability

(iv) における 'readability' は，音韻部門で最終的に派生される．

上例はいずれも前述の T nom を適用し，文構造から生成したものである．実際には，'readable' は 'able to be read' よりもはるかに意味上の限定力が強く，そのため 'meaning-preserving' の点でも欠陥がないとは言えない[27]．

つまり semantic grounds からも selectional relations の場からも weak であるといえよう.

これは, Gerundive nominals の変形が, 内部構造においてはより sentence-like structure をもつことで数多くの grammatical transformations を内包するのに対して, Derived nominals が nominal 自体と proposition との間に更に多様で特殊な意味関係をもつことに理由づけられるのであろう. 前述のように, 多くの制限 (restrictions) により productivity が規制され, derivative morphology は, 個々の meaning と semantic relations とを base form で考え合せるとき, 意味部門では数多くの semantic features に依存しなければならないように思われる[28].

次に, T passive 変形 (Optional) をもとめてみよう.

(47) T passive:

SI: $\underset{1}{\underline{NP}}\ \underset{2}{\underline{Aux}}\ \underset{3}{\underline{Pass}}\ \#\ [\underset{4}{\underline{NP'}}\ \underset{5}{\underline{Aux}}\ \underset{6}{\underline{V}}\ \underset{7}{\underline{X}}\ \underset{8}{\underline{NP}}\ \underset{9}{\underline{Y}}\ \underset{10}{\underline{by}}\ \underset{11}{\underline{D}}\ \underset{12}{\underline{Z}}]\ \#$

SC: a. Substitute NP′ for D

b. Delete the identical elements from the embedded sentence and #

c. ⇒ 1 2 3 6 7 9 10 11 12

where: Pass=be+En

直接 S から導入され転換される T passive 変形に, 名詞化の T nom 変形を加えてみよう. T nom 変形は, 句構造の nom の Node に適応する変形であるから, 変形操作の手順としては T passive 変形のあとでおこなわれることになる.

これを適用させると概略次のようになろう.

(48) (i) the city Aux be+En # [the enemy Aux destroy the city by D] #

⇒the city Aux be+En [destroy by the enemy]

(ii) the city POSS-Morph $[[\text{be+En destroy}]_V$ $[\text{by the enemy}]_{Man}]_{VP}$

(iii) the city's [+N, be+En destroy] by the enemy

(iv) the city's destruction by the enemy

(iv) における 'destruction' は，音韻部門で最終的に派生される．

この場合，T passive 変形を許さない pseudo-transitives (marry, resemble, weigh, etc.) が阻止されるので，次のような文連結は生成されない．

(49) (i) John's marriage to Marry→* the marriage to Marry by John

(ii) John's resemblance to Bill→* the resemblance to Bill by John

S から展開される Nominalization においては，次のような文連結も阻止される．

(50) (i) * our election of John (to be) president

(ii) * our consideration of John (to be) a gentleman

各々の深層構造を考えると，概略 (51) (i), (ii) になろう．

(51) (i) $[\text{we}]_{NP}$ $[[\text{elected}]_{V}$ $[\text{John}]_{NP}$ $[\text{John be president}]_{S}]_{VP}$

(ii) $[\text{we}]_{NP}$ $[[\text{considered}]_{V}$ $[\text{John}]_{NP}$ $[\text{John be a gentleman}]_{S}]_{VP}$

深層構造では 'to be president', 'to be a gentleman' はいずれも Vt comp であるので， Derived nominals に変形した場合， 'John to be president', 'John to be a gentleman' の形は表層構造では許されない．

(51) (i) の深層構造に T nom 変形をおこなうと，

(52) (i) we POSS-Morph elect John [John POSS-Morph be president]

(ii) our election of John [John POSS-Morph be president]

これに Identity Erasure Tr. が適用され，

(iii) our election of John [+N, be president]

Preposition Placement Tr. により，

(iv) our election of John to the presidency

を得る．

3．2　表層構造でもつ意味のあいまい性と深層構造について，若干の問題を考察してみよう．

Possessivizing Tr. によって派生される 'John's picture' のような constructional homonymity は，次のような深層構造を仮設することで説明されよう．

(53)

$$X—N\left\{\begin{array}{ll}(i) & [\text{that John HAVE}] \\ (ii) & [\text{of John}] \\ (iii) & [\text{that John DO}]\end{array}\right\}—Y$$

where: DO=PRO form of the verb

(i) はいわゆる genitive, (ii) は accusative, (iii) は nominative function をもつものである．次の場合，

(54)　(i)　John's picture of Mary
　　(ii)　the picture of Mary by John

(i) の 'John's picture' は，深層で (53) (i), (iii) の 2 つの構造をもつため，2 つの意味解釈があたえられる．しかし (ii) は T passive 変形から派生されたもので，意味上のあいまい性は見つからない．

(55)　(i)　the growth of tomatoes
　　(ii)　John's growing of tomatoes
　　(iii)　the growing of tomatoes

上例はいずれも深層構造に T nom 変形が操作されて派生した表層構造である．

深層から表層への変形については，grow, break, make, etc. の一連の動詞は，次のような深層構造と変形をもつと考えられる．

(56)　(i)　NP $[[+\text{cause}]_V\ [\text{tomatoes grow}]_S]_{VP}$
　　(ii)　NP $[[+\text{cause, grow}]_V\ [\text{tomatoes}]_{NP}]_{VP}$

つまり，(i) の主文の V を補文 S の動詞で置きかえる Causative Tr. によって，(ii) の構造に転換され得る．

(55) (i) は，(56) (i) の補文 S に T nom 変形が加えられて，[tomatoe's growth] を得，これに Of Inversion Tr. がおこなわれて生成されたものである．一方，(55) (ii) は，(56) (ii) に T nom 変形が加えられ，[John POSS-ing grow of tomatoes] を得て生成されたものである．しかし，(55) (iii) の場合，深層構造は (56) の両者を仮設することができるため，2つの意味解釈が成立する．

(56) (i) John's being eager to please
(ii) John's being easy to please
(57) (i) John's eagerness to please
(ii)* John's easiness to please

ひろく周知の例文で，意味解釈については深層構造を仮設しないかぎり成立しないことの典型としてあげられる．ここでは，nominal の選択にあたって，(56) では両者が可能である2つの文連結が，(57) ではその一方が阻止される問題の理由を考えてみよう．

(58) (i) $[\text{John}]_{NP}$ $[\text{be eager}]_{VP}$ $[\text{for us to please}]_{S}$
(ii) $[[\text{for us to please John}]_{S}]_{NP}$ $[\text{be easy}]_{VP}$

上例で示されるように，深層構造においては，'eager' は [+__sentential complement] であるのに対し，'easy' は [+be__] である．従って Derived nominal の 'easiness' は，'to please' という sentential complement を後続させることができない．しかし，(56) の Gerundive nominals ではこの制限を受けない．Gerundive nominals では，表層構造に見られる文構造が，そのまま名詞化の文連鎖にとり得るのである．

4. 0 おわりに <Supplementary>

Nominalization の広域な分野の緒を，「ことば」のもつ内部構造の特性をたよりに考えをかさねてみた．なくてはならないものの選択と，なくてもいいものの省略との段階で，更に統合された規則の形がこれに代行しなくてはならな

いであろう．音韻部門での stress-shift, 意味部門での semantic features の問題については省略した．

〔注〕

(1) Noam Chomsky: *Syntactic Structures*, p.49.
(2) Kenneth L. Pike: *Language in Relation to a Unified Theory of the Structure of Human Behaviour*.
(3) Owen Thomas: *Transformational Grammar and the Teacher of English*, p.74.
(4) J. Otto H. Jespersen: *M.E.G.*, II, p.211.
(5) H. A. Gleason, Jr.: *Linguistics and English Grammar*, p.118.
(6) Noam Chomsky: *Aspects of the Theory of Syntax*, pp.64–68.
(7) Noam Chomsky: "Remarks on Nominalization", pp.36–37. (Z. S. Harris によるもの.)
(8) M.E.G. VII, pp.437–438.
(9) Carlota S. Smith: "Determiners and Relative Clauses in a Generative Grammar of English", *Language*, Vol. 40, No. 1, p.44.
(10) *Ibid.*, Restrictive Relative に対する 'Non-restrictive' Relative にかわり, 'comma or comma intonation' を置いて wh-関係節を導くものとして, Appositive Relative の概念と用語を使用.
(11) *Ibid.*, p.47, p.49.
(12) M. Kajita:「変換文法における関係詞節の問題」(英語教育, Vol. XVII, No. 4.) p.61.
(13) *Aspects of the Theory of Syntax*, pp.165–166.
(14) この記号は feature complex である.
(15) Jespersen の 'Half-pronominal Adjectives' に該当するものと考えられる. M.E.G. II, pp.281–282.
(16)「変換文法における関係詞節の問題」(前出).
(17) Robert B. Lees: *The Grammar of English Nominalizations*, (Fourth printing), p.59 ff. 及び, Peter S. Rosenbaum: *The Grammar of English Predicate Complement Constructions*, § 3.
(18) *Ibid.*, § 5.
(19) *The Grammar of English Nominalizations*, pp.64–69.
(20) "Remarks on Nominalization", p.41.

(21) *Ibid.*, pp. 18–19.

(22) *Ibid.*, p. 21, pp. 43–44.

(23) 江川泰一郎:「文の転換」表現篇, 第11巻, p. 15.

(24) John Robert Ross: *Constraints on Variables in Syntax*, pp. 275–276.

(25)* John's being reading the book, * John's having being reading the book, etc. の ungrammatical sentences の派生を阻止するもの. (n は自然数.)

(26) 'Morph' は, Derived nominal を派生する nominalizing morpheme (e. g. -ity, -ment, -al, -tion, etc.) を意味する記号.

(27) "Remarks on Nominalization", p. 38, p. 48.

(28) J. J. Katz and J. A. Fodor: "The Structure of a Semantic Theory", pp. 491–492, *The Structure of Language* (Readings in the Philosophy of Language).

最後に, 本稿の発表の機会をあたえて下さった名古屋大学, 榎本太助教授ならびに有益な助言をよせていただいた佐藤一夫教授に感謝をおくります.